

『新越後物語』を通して

人文学部情報文化課程 吉野 剛

昨年、私たちのゼミでは新潟国際映画祭において、約50年前に新潟で撮影された『新越後物語』という映画の上映に参加しました。映画祭実行委員会のご協力をいただき、映画祭のオープニング・イベントとして上映することになり、私たちは併せてトークショーや資料の展示なども企画しました。当日はたくさんの方に来場していただき、見事成功を収め、ゼミ生全員にとってかけがえのない経験になりました。

上映が成功に終わった後、私はこの映画をさらに掘り下げてみたいと思い、卒論の題材にとりあげることになりました。この映画の背景にあった当時の新潟を知るために、撮影スタッフとして参加した方や舞台となった地元の方などにお話を伺ったり、当時の新聞を調べたりしました。一本の映画を巡って、いろいろな方との交流が生まれるとともに、郷土の歴史にも触れ、新潟に住む自分自身を見直す貴重な機会を持つことができました。



Feature : ゼミ・卒研・研修



本人後列右から2人目

学生最後の1年を振り返って

理学部化学科 丸田 和幸

長かったようでとても短かった大学生活。特に研究室に入ってから一年間はあっという間に過ぎてしまいました。3年生までは教えられているだけの勉強であり、実験においてもある程度結果がわかっていました。卒業研究は全くの「未知」であるものの研究であるため、結果が出ることによって興味が増し楽しくなり、そのことによって自分の行っていることを認識できて、大学に入ってから初めて自分から勉強しようという気持ちになりました。目的をもって勉強することの大切さを改めて実感しました。

また、勉強だけではなく楽しいことも多くありました。研究室の行事がたくさんあり、ゼミ旅行では長野、山梨に行きました。学生最後の年に旅行ができ、とてもよい思い出になりました。研究だけではなく思い出に残ることも多く、とても充実していて大学生活が凝集されているような1年間を過ごしたような気がします。

卒業研究を終えて

教育学部小学校教員養成課程 井村 真理子

憧れの大学生活がスタートし、一年があっという間に過ぎた。友達もたくさんでき、授業にも慣れた二年生後半になったころ、ゼミの専攻を決めることとなった。高校時代に学んだ『源氏物語』をより深く学びたいと思い、古典ゼミに入ることに決めた。物語の中の一人の人物に着目し、その人柄や気持ちを深く掘り下げていった。初めは一面だけしか見られなかったが、先生のご指導や、先輩、同輩達らの指摘などにより、研究の方向性が見つかり、自分の気付かなかった事柄が発見できた。本当に多面的な見方ができるものだと驚きの連続だった。このように二年間も一つのテーマを追求するという事は、学生時代にしかできないことである。この経験を生かし、人生を豊かなものにしていきたいと思う。



本人右側



本人右から5人目

「所謂青春の1ページ」

理学部地質科学科 佐藤 洋子

我々の地質科学科は学内の数ある学科の中でも、最も、巡検等で野外に出る機会が多い学科でしょう。

その巡検の中でも1番のイベントが「大巡検」です。これは2年の春休みに学年全員+引率の先生方と、10日間ほど遠隔地の地質を見学して回るものです。我々の学年は中国・四国地方に行きました。新潟では見られない珍しい岩石や構造を見学し、とても有意義な巡検となりました。一方で、皆で新潟から集合場所の山口県まで鈍行列車で1日以上かけて行ったり、途中で誕生日を迎えた友人を祝ってあげたり、連夜の酒盛りで二日酔いになったり、他にもここには書けないような事件を起こすなど、学生時代にしか出来ない体験をいろいろしました。

各地の美しい風景も、ちょうど見頃だった桜とあいまって忘れられません。準備から全日程終了まで何かと揉めたりと、大変なこともありましたが、学年全体の貴重な思い出が出来ました。

病院実習

医学部医学科 向井 玄

医学部の学生は約二年間病院で実習を行う。実習期間中は様々なことがあったが、一番印象に残っているのは外科の実習での患者さんとの関わりである。実習中は毎朝患者さんのところへ行ってお話を聞き、所見をとるのであるが、そのうちにこの患者さんと仲が良くなって雑談も多くなるようになった。手術も見学し、術後は患者さんから手術中のことを中心にいろいろ質問されたが、答えられる範囲で一生懸命答えた。

一つの科の実習は二週間なので、一人の患者さんの入院から退院まで担当することはまれである。この外科での患者さんでも例外ではなかったが、ある日この患者さんから手紙を頂いた。そこには退院したこと、および学生である私に対する感謝の気持ちがかかれていた。

医者や医療全般に不信感がますます強まる今日この頃であるが、病院実習でのこのような経験を大切にしていきたい。



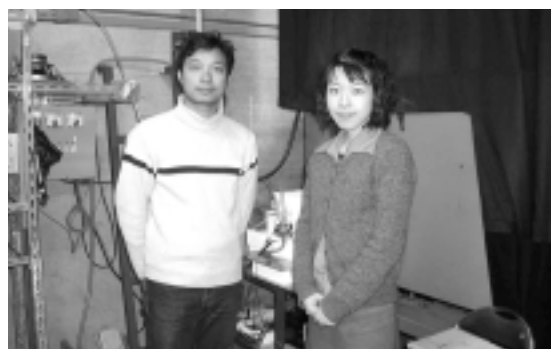
卒業にあたって

歯学部歯学科 平原 泰樹

早いもので、私が入学してから6年が経ちました。6年という時間があっという間に過ぎ去った感じがします。そして卒業を迎えるにあたり、最後の1年間に経験した臨床実習は、非常に貴重な経験でした。特に、実際に患者さんの治療をする中で、「コミュニケーションの取り方」という点で、普通では学び取れないことをたくさん学びました。これは本や普通の勉強の中ではなかなか学べるものではなく、じかに人と人に接さなければわからないものです。大学生活の中でそのような機会を得たということは非常に幸運なことで、これを卒後の糧とし、研鑽を重ねたいと思います。



ゼミ・卒研・研修：Feature

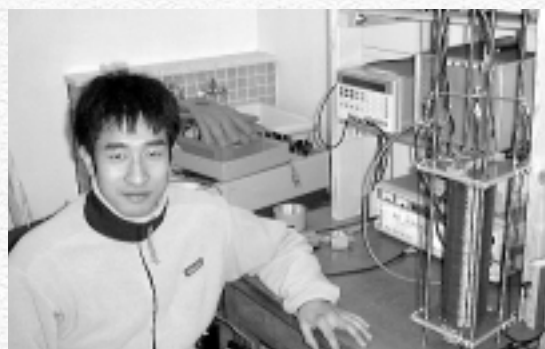


卒業研究について

工学部機械システム工学科 松田 望美

期待と希望、そして不安...といった思いを胸に入った研究室。私は新入社員になったような気分だった。初めは、一人一テーマである卒業研究をどう自分で進めて良いのか、戸惑うことばかり。昨年度までとの最大相違点といえば、正しい解答がないということだ。講義にしても実験にしても、答えがあることになれていた私は、常識にとらわれ、足踏みしてしまうことが多かった気がする。知識は必要であるけれども、新鮮なアイデアを出すためには邪魔な場合もあるのだ。

1年が経とうとしている今。先生が常々おっしゃっていた、「実験をしてみて初めて分かることが非常に多い。」という言葉を実感している。入った当初、ものすごく特別で優秀な人だけだと感じていた先輩方も、(多少の差は置いておくとして)初めから全てを理解していた訳ではないのだろう。経験一つ一つが財産となり得る。そういった意味で、この1年は今までの倍、もしかしたらそれ以上のものを得ることができたと自信を持っている。



研究室での1年間を振り返って

工学部電気電子工学科 吉田 俊貴

私は、福井研究室で超伝導の研究をしています。みなさん、“超伝導”という言葉はどこかで聞いたことがあると思います。たぶんほとんどの人は、磁石が浮かんでいるようなところや、リニアモーターカーなどを想像すると思います。私は超伝導体でできた電線を作る際の基礎的な研究をしています。研究といっても、夏休みが終わる頃までは実験で使用する大型コイルの設計・製作で研究らしいことはなかなかできませんでした。それが終わってからも、実験をしては工作をしての繰り返しでした。後から聞いた話ですが、この研究室の実験班は、特に実験に使うものを自分たちで工作するそうで、それは先生の影響のようです。また4月から大学院生としてこの研究室に残ることができるので、今の研究をさらに深くできればと思います。